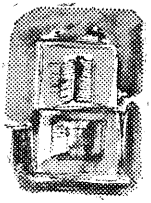

幼児の発達と教育計画 ①

津守　真

私はここで、幼児の発達を中心とした教育計画について考えてみたいと思う。それには二つの問題がふくまれている。第一には、教育計画と直接関係のある発達の側面は何かということ、幼児期にはそれはどのような発達段階にあるのかをみることである。第二には、幼児期の発達にもとづいた教育計画とはどのようなものかということである。

まず、第一の問題から考えることにしよう。

教育計画には子どもの発達の状況をきりはなして考えることはできないし、発達を無視して教育計画を考えるならば、それは生活から遊離してしまう恐れがある。ことに幼児期にはいろいろの基本的能力が発達する時期なので、発達を促進させるところに教育計画の意義も生れてくる。このように考えると、幼児の発達のあらゆる面が教育計画と関係をもってくるが、とくにここでは教育計画全般と直接関係のある側面をとりあげてみたい。

一、おとなと子どもとの関係の発達

教育計画は、おとなと子どもとの間に成立するものである。おとなが子どもに対してある関係を保って教育計画がおこなわれるので、子どもの発達につれて、おとなと子どもとの関係が変化していくならば、教育計画の性格も変化してゆくことになる。そこでおとなと子どもとの関係が子どもの発達とともにどのように変化するかをみて、教育計画の性格の変化を考察してみよう。

子どもは生れたときからおとなと密接な関係をもっている。その第一の時期は、おとなが子どもをもっぱら保護する時期である。生後半年、あるいは七、八か月までの乳児は、自分が生存するのに必要なことをおとなにやってもらわなければ、自分で食事をとること

さえできない。子どもが生存するのにおとなに依存することが必要であり、おとなは子どもの必要としていることをもっぱらみたしてやるのである。だから、子どもが乳を欲するときには乳をあたえ、睡眠を欲するときには睡眠できるようにして、子どもの要求と必要とにしたがっておとながそれをみたしてやるところに、この時期のおとなの機能がある。すなわち、この時期は子ども中心の時代であり、子どもが中心となってまわりの世界が廻転する。おとなは子どもに従属しており、子どもはおとなにまったく依存している。

第二の時期は子ども全能の時代である。年令からいうと、生後八、九か月から一年半くらいの間である。この期間に子どもは自分の要求を意識するようになり、自分の意志をもつようになる。食物にも好きなものと嫌いなものができ、玩具も、いまこれで遊びたい、あれではいやだというような選択が生じる。気にいらないことがあるとものを投げて怒ったりする。このように子どもは自分の要求を意識して通そうとするが、まだ他人の要求や意志を理解しない。「これをしてはいけません」というようなおとなの禁止を理解できないから、おとなが何をいっても馬耳東風である。子どもには自分の要求が意識されているだけで、他人の要求は意識されないから、子どもの世界にはいわば自分の意志だけしか存在しない。いわば子ども全能の時期である。そしておとなは子どもの要求をある程度みたしてゆくことが必要であり、それによって子どもはおとなに対する基本的な信頼感をもち、また外の世界に対する積極的な関心をもつことを学んでゆくのである。

第三の時期は、いわゆるしつけの時代である。年令からいえば、一才半から三才くらいの間である。この時期には子どもの意志や要求がいっそうはっきりしてくる。またおとなの意志や要求をも理解するようになり、「いけません」というおとなの禁止がわかるようになる。こうなると子どもの意志とおとなの意志とがしばしば対立するようになる。子どもはお菓子をくれというし、おとなはいまはいけませんと禁止をする。こうして、この期間を通して子どもは自分の意志を通すことを学ぶと同時に、ある場合には自分の意志が通らないことを学ぶ。子どもにとってはおとなと力だめしをする時期であり、おとなにとっては訓練、しつけの時期である。すなわち、この時期には、おとなはどんなことがあっても子どものいうことをきいてはならないことがあるし、子どもの意志を通してよい場合と悪い場合とをよく見わけることが必要になる。

上の三つの時期は、おとなとの関係といっても、その大部分は母親との関係である。あるいは、母親がわりの特定の保育者である。上にのべたように、これらの時期には、子どもの個人的な要求をみたすことがきわめて必要なので、この時期に母親はひじょうに大き

な役割をはたすのである。そしてこの時期に母親にじゅうぶんに依存することを学ばなかった子どもは、次の時期に母親からじゅうぶんに独立することができなくなる。のみならず、母親との正常な関係を保てなかった子どもは、情緒的にも不安定になったり、人間関係に自信がなくなり、また他人とうちとけた関係をもつことができなくなる。

従来、小さいときに親が子どもを甘やかすと親に対する依頼心が強くなると考えられてきたが、むしろ親がじゅうぶんに愛情をあたえ、面倒をみることができなかった方が、後にいろいろの問題を生じている。そして、幼稚園時代に依頼心の強い子どもがかならずしも甘やかされた子どもであるとは限らない。むしろいろいろの事情でじゅうぶんに親に依存することができなかった場合に、いつまでも依頼心の強い子どもになる傾向がある。

さて、第四の時期は、幼児期である。この期は独立、協力時代であり、年令では三才から七才くらいまでである。この時期には、子どもは一応親の手からはなれて、他のおとなとともに生活できるようになる。他方、子どもはおとなと協力してゆくことができるようになる。力だめしの時期を経て、子どもはおとなに期待し、おとなに要求することがわかってくる。そしてそのおとなの範囲も、家庭から外に拡大してゆく。

しかしその初期、また前段階からの移行期には、家庭外のおとなも、母親のような立場で接してゆくことによって、子どもはいっそう広い社会に安定した気持ではいってゆくことができる。三才児の保育の場合には、とくにこの点が重要である。

さらに、この時期の子どもは、しだいにおとなと一しょに協力してあそんだり仕事をしたりすることができるようになる。子どもが自分の要求を通そうとするだけでなく、またおとなが一方的に命令するだけでもなくて、子どもとおとなが共通の目標をもって、話しあいながら仕事をすすめてゆくことができる。したがって、おとなは子どもの考えをいかし、またおとなの考えをも出すことによって、子どもだけではゆきづまってしまうところを打開して、あそびや仕事を発展させてゆくことができる。この時期の教育計画では、このようなおとなと子どもとの関係を基本にして考えることが必要である。

次に、第五の時期には、おとなと子どもとの関係が減少して、子ども仲間がもっと大きな位置を占めるようになる。仲間時代である。年令からいえば、八、九才から上である。幼児期から子ども同志の関係はましてくるが、この時期になって頂点に達する。したがってこの時期には、子ども同志の関係をもっとも有効に生かして教育計画を立てることが必要である。

幼児期の前後の発達を考えて、とくに幼児期におけるおとなとの関係を考えてみたのであるが、教育計画との関係を要約してみるならば、次のような点を指摘することができる。

一、幼児は母親からはなれても、おとなに基本的に依存しているという安心感をもつことが必要である。

二、子どもはおとなからはなれて、自分で考え、判断してゆくようにしむけることが必要である。

三、困ったときなどに、おとなの協力を求められるような関係が成立していることが必要である。

四、おとなは子どもの考えをいかしながら、話しあって計画をすすめてゆくことが必要である。

二、子どもの意図的な行動の発達

教育計画と関係の深い発達側面の第二の点は、子どもの意図的な行動がどのようにして発達するかということである。その発達程度によって、子どもがおとなにはたらきかける態度が違ってくるからである。

第一の時期は子どもが明確な意図をもたない断片的な活動の時期である。それは大たい三才から三才半くらいまでの年令である。三才児を保育して、四、五才児に比べて気がつく特長は、子どもがよく動きまわることであろう。彼らはいまこのことをしていたかと思うと、次の瞬間には別のことをしている。いましていることと、次にすることとの間に関連性がないのである。たとえば、積木をやっていて蝶がくるとそれを追いかけ、そこで石につまずくと今度はその石であそぶという工合である。つまり行動がひとつひとつ断片的である。絵をかく場合にも、はじめから何をかこうと意図をもってかくのではなく、かいているうちに、人になったり家になったりする。意図はあとから生れるのである。

このような時期を経て、子どもはしだいに意図をもち、その意図にむかって行動をおこすようになる。しかし意図をもった活動も最初は自分ひとりの活動が多い。この段階では、まわりのおとなは、子どもが意図をもって追求することを許してやり、それを承認してやることによって、子どもの意図的行動が発達してゆく。

さらに次の段階になると、子どもは他人と共通の意図や目標をもって活動するようになる。たとえば共同製作の場合も、二、三人でひとつのでき上りを頭に描いて、おたがいに仕事を分担する。ごっこ遊びでも、その中で役割はいろいろあっても、共通の目標をもって参加するようになる。

このように数人で共通の目標をもつ活動は、幼児期には完成されないが、幼児期にすでにその芽ばえはみられる。それがさらに高度

に発達するのは小学校になってからである。

教育計画の上から考えるならば、周囲のおとなが、子ども自身で意図をもち目標をもって活動できるようにしむけ、そのような環境をつくってやることが重要になる。子どもは一度経験したことを、次の機会には自分で試みるようになるので、いろいろの経験をするように、教師が一しょにあそび、また環境を豊富にすることが必要なことである。さらにすすんでは、子どもの意図を理解することをつとめ、適切なところに教師の意図をさだめて、子どもが他人の意図をも理解してゆけるようにすることが必要である。

三、時間意識の発達

教育計画は、子どもがどれだけ将来のみとおしをもって行動できるかということと関係深い。しかし時間意識の発達はきわめて徐々であって、成人期にいたるまで少しずつ発達しつづける。

乳児期や幼児初期には、子どもには過去も未来もなく、子どもはまったくそのときの瞬間に生きている。以前にやったことに強く固執することもなく、また将来のめあてもない。このことは意図的行動の発達にもみられたことである。

次にあらわれるのは未来である。「きのう」ということばよりも、「あした」ということばの方が先にあらわれる。お話の内容でも、「きのうこうした」ということよりも、「あしたこうしよう」という方が幼児には強い関心がある。こうしてさらに進むと、「いましているこのつづきを、あしたしよう」というように、あしたやることまで考えることができるようになる。五才の終りころには三日から一週間くらいの莫然とした時間の巾を意識して、活動することができるようになる。

このことを教育計画と結びつけて考えるならば、幼児期には時間意識が芽ばえる時期であって、ふじゅうぶんではあるが、しだいに、今日やること、あしたやること、きのうしたことの間に関連をもたせることができるようになり、したがってしだいにそのような方向にしむけてゆくことが必要なのである。

以上、発達の三つの側面について、教育計画との関係をみたのであるが、幼児期の発達段階を考えるときに、子どもが自分の意図をもち、他人と共通の目標をもって活動できるようにすること、きのうしたこと、今日すること、あしたすることが関連をもってゆくこと、そして教師と子どもとがともに参加して教育計画をすすめてゆくことが、教育計画の上に必要なことになる。

それではこのような教育計画はどのようにして実際になされるのであろうか。次にその点を主として考えてみよう。（つづく）

＊　＊　＊